

高等学校国語科採点基準

3枚のうち1

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号		正 答		採 点 上 の 注 意		配 点
□	問一	㉔	4			各 3 × 2
		㉕	1			
	問二	1				3
	問三	2				3
	問四	4				3
	問五	3				6
	問六	近代文学の視点によって再構成され、近代西洋への批判として創造された表象ではなく、実体のない、近代文学の彼岸に想定されるべき不確かなもの。(68字)		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。		8
	問七	物語的な時間をふくむ対象を処理しており、場のあり方が先験的で形而上的なモデルとして存在しているという点。(52字)		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。		8
	問八	筆者は本文において、「固定的な視点を持つ一人の人間」の視点から世界を見るという表現方法が、近代文学における客観及び主観を作り出すと論じている。また、筆者は「固定的な視点を持つ一人の人間から、統一的に把握される」対象を「風景」と呼んでいる。このことから、筆者は、主観を備えた「固定的な視点を持つ一人の人間」の視点から客観的に捉えられた対象を「風景」と考えていることが分かる。これらを踏まえて【資料】を読むと、「自分は此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此人をずっと眺めてゐた」という部分で、語り手の視点で捉えられた景色が客観描写されつつ、語り手の抱く寂しさが景色に付与された主観性のある描写となっていることが確認できる。また、「船が進むにつれて人影が黒い点のやうになつて了つた」という部分で、船の進行に沿って、語り手が島かげにいた男から離れていくことが表現されており、語り手の視点から対象が捉えられていることが確認できる。 以上のことから、筆者が島かげにいた男について、「風景」としてみられていると述べたのは、【資料】においては語り手という主観性を備えた「固定的な視点を持つ一人の人間」から客観的に世界が捉えられており、島かげにいた男は語り手から捉えられた対象の一つであったためだと考える。		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。		15
	問九	㊦	恨			各 2 × 5
		㊧	系譜			
		㊨	しょうよう			
		㊩	しつよう			
		㊪	ごせい			

62

高等学校国語科採点基準

3枚のうち2

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号		正 答 [例]		採 点 上 の 注 意	配 点	
目	問一	ア	3		各 3 × 2	4 0
		イ	4			
	問二	1			3	
	問三	2			3	
	問四	A	そのように言うな	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	各 6 × 2	
		C	どこからと申し上げようか			
	問五	男たちが担ぐ、顔が見えないほど多くの菖蒲。(21字)		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	6	
目	問六	「どことも知れぬ沼の菖蒲のように誰と分からなくても、私の家は通り過ぎないでほしい」という内容の和歌Dを贈ってきた若い女房に、中將の君が「あなたの家を見分けることもなく、通り過ぎてしまった。どの家も同じように軒端に菖蒲が隙間なく葺いてあったので」という内容の和歌Eを返すことで、女房の家の前を素通りしないように求める和歌に応答しようと考えたから。		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	1 0	3 6
	問一	2			3	
	問二	3			3	
	問三	2			3	
	問四	4			3	
	問五	C	4		各 3 × 2	
		D	1			
	問六	殺したのはみな普段からの怨恨がある者である		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	8	
	問七	高祖が親しい者だけに位を与えており、全ての臣下に位が与えられないことを不安に思っていたが、憎まれている雍齒が高祖に位を与えられたことを知り、自分たちも位を与えられると考えたから。		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	1 0	

高等学校国語科採点基準

3枚のうち3

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号		正 答	〔例〕	採 点 上 の 注 意		配 点	
四	問一	1				6	12
	問二	3				6	
五		【教材1】と【教材2】を比較して読むと、「文章の構成や展開」については、直実が敦盛を取り押さえる場面、直実が敦盛を助けようと思う場面、直実が敦盛の首を切る場面という構成は共通している。展開については、【教材2】では「なんぢにあふては、なのるまじひぞ」と述べ、敦盛が名乗らないままであるのに対して、【教材1】では「討たるべき身なれば、又かやうに云ふも疎かならず」と述べ、直実の言葉を聞いた敦盛の思いが描かれ、名を明かす展開につながっていることが分かる。また、【教材2】では「人手にかけまいらせんより、同じくは、直実が手にかけまいらせて」と述べるのに対して、【教材1】では「熊谷手取りにしたる敵をゆるしてけりと、兵衛佐殿に漏れ聞かれ奉らむ事、口惜しかるべし」と思い、「只今助け進らせて候ふとも、終にのがれ給べからず」と述べており、他の人物や戦全体の形勢から直実が敦盛の首を取る決断に至る理由付けがされている。 「表現の仕方、表現の特色」については、【教材2】では「むずとくんでどうぞ落ち」と述べている部分が、【教材1】では「上になり下になり、三はなれ四はなれくみたりけれども、ついに熊谷上になりぬ。左右の膝を以つて鎧の左右の袖をむずとをさへたりければ、少しもはたらかず」と位置関係や二人の動きの流れが分かる表現となっている。また、【教材2】では敦盛の容貌について「容顔まことに美麗也ければ」と述べているのに対して、【教材1】では「鮮媚たる両髪は秋の蟬の羽を並べ、菟転たる双蛾は遠山の色にまがへりなむ」と述べており、比喩を用いた表現となっている。 以上のことから、【教材1】は、行動に至る経緯が詳細に説明されたり、数や位置の説明、比喩等を用いて詳細に表現されたりしていることで、読み手が場面や登場人物の心情、人物像をイメージしやすくなる点が優れた点として挙げられる。 一方で、擬態語を用いながら簡潔な表現でテンポ良く語る【教材2】に対して、【教材1】は説明的で冗長な印象を与えてしまう点に文章としての課題があると評価できる。			問いを正しく捉えていれば、内容は異なっていてよい。		50